

第42回 うつのみやこども賞だより

令和7(2025)年度 5回

市内5・6年生の選定委員さんたちが、月に4冊の本を読んで、年間で一番友達にすすめたい本に「うつのみやこども賞」を贈っています。

《今月選ばれた本》

『アリゲーターガーは、月を見る』

山本 悅子／著 ゴトーヒナコ/絵（理論社）



令和7年10月5日

『白い虹を投げる』

吉野 万理子／作 黒須 高嶺／絵 (Gakken)

- 弟のトモに対する葉央の気の使い方に変化がおきるところがよかった。
- ヤヤと葉央の文通がとても楽しそうだった。キャッチボールをしている時は、ふたりがつながって見えた。
- 同じチームだったとしてもようしゃしないよ、という二人に本当のきずなを感じた。
- 声がわりでなやんでいる葉央くんへの手紙が最終的にあって、それを読んでいると胸がしめつけられた。
- 最初はヤヤが野球チームになじめなくてかわいそうだけど、最後はバスケットチームにもしようとしてもらい、野球にもはじめてよかった。
- と中に手紙がたくさんてくるところがいいと思った。

『この手はいつか』

中山 聖子／作 保光 敏将／絵（文研出版）

- お母さんがどこに行ったのかすごくドキドキした。「ワーテンくん」と言われても、また学校に行くのがすごいと思いました。
 - 一学期でひどい目にあったのに、二学期目で学校に行ったのが気持ちをきりかえられていてすごいなと思った。
 - お母さんの作ったマグカップと真潮の作ったマグカップが、同じ作り方で作られたものだとわかって、びっくりした。
 - 早川くんは「真湖がやったのには理由がある。」と藤巻先生より分かっていて、やさしいなと思った。
 - おじいちゃんといっしょにくらしながらいろいろな人に会って、前向きに成長していくところがすごくおもしろかったです。
- ～読んだ本の感想より～
- アリゲーターガーと仲良くなつて、とっても仲間思いだと思った。
 - 外来種はニュースとかでみると、「はやくたいじしてほしい」と思っていたけど、この本を通してその考えはすこしちがうきがしたりしておもしろかったです。
 - 今まで外来種は、悪いやつというイメージがあったがわかった。
 - 「こどく」は、その三人だけのものだと思っていたけれど、読み進めるうちに、「こどく」は、だれの心にもあると思いました。
 - 「このお話の出来事は本当にあったことなんだよ。」と友達が言っていたことを聞き、とてもびっくりしました。
 - 三人の不安をやさしいまなざしで見つめていたアリゲーターガーは、たとえ外来種でもやさしい心をもっていたと思った。
 - 1人1人の感情があらわされていておもしろかった。ガードの気持ちも理解しながら読んだ。

『ぼくへのレファレンス』

岩崎 まさえ／作 黒須 高嶺／絵 (国士社)

- 二人だけの一揆について三重吉につたえられてよかった。
- 市民図書館の貴重書庫をとくべつにみられていいと思った。
- 二人だけでおこした一揆が、その村の未来につながっていてすごいなあとと思いました。
- 主人公のレファレンスのおかげで事実は変わらないということがわかつてよかったです、「一揆」などのこともしめたのでいいと思いました。